１．兵役

（※ 関連資料のある箇所は太字で示してあります。）

６．（１）終戦後

【木 田】それから終戦後は，まあいわゆる俗っぽくいえば捕虜ですが，捕虜になって，シンガポールの南の島に追っ払われたんですね，ジャワ海の小さな島に。そしてそこで何とか迎えの船が来るまで自活していろというようなことですから，またマラリアの蚊の中で，食べ物が少ないところで半年以上仕事をしていました。仕事というのは，実は戦後の方がある意味で忙しかったのでして，それは私がたまたま輸送部隊にいたということで，南方軍の日本人の引き揚げ，輸送というのを一応担当することになっちゃったのです。７万人，軍人・軍属を入れて南方におりまして，それを，船によってはそんなにたくさん積めませんから，便が動くごとに乗っけて内地へ送り返してもらうという仕事をしておりました。戦争中はシンガポールで電報を読んでいるだけの仕事だったのですが，戦後は無人島に入って，それぞれ様子の違った軍隊･軍属，そういう人たちに，それぞれ生活をさせるということ。ですから，桟橋をつくるところからやっていかなきゃいかんのですが，送り戻すという仕事をいたしましたから，戦後になって忙しくなったという感じがしています。

しかし，食べ物がなくなってくるしですね，しかし如何物(イカモノ)だけ食べなければ，何とか寿命というのは続くもんだなあという実感を持って帰ってきたんですけれども。そのとき，そうした軍隊生活全体を通じて私自身が感じたことは，見習い士官の端くれではありますが，肩章，階級というのは，本当に事が起こったときには役に立たんということだけ，これはよくわかりました。平時において階級章というのが意味を持つんですね。ところが戦乱だとか，土壇場だとか，いろんな状態が錯綜してきますとね，この肩章の星の数は全然意味をなさない。おろおろしちゃう人が出てくるんですね。ですから，社会的な階級というのが意味を持っておるというのは，平時においてのみである。そして，戦闘状態になって，いろんなことが難しくなってくると，弾がどっちから飛んでくるかわかんなくなっちゃうんですよ。これは人物というものができていなければ，本当に秩序というものを維持することはできないなあということだけは，しかと体験をいたしました。